

実践報告 (Report)

# 小学校外国語指導法授業における J-POSTL Elementary の導入と KPT の3観点によるリフレクションによる履修生の指導意識への効果

## Effects on student teachers' teaching attitudes by introduction of J-POSTL elementary and reflection on the three perspectives of KPT in an elementary foreign language teaching methodology class

安達理恵\*

ADACHI Ric\*

### 要 旨

2020年度はコロナ感染症によって、対面の授業や教育実習の実施には困難があった。そのような状況でも、教育学部で教員を目指す学生には、一般的な指導力の向上と、外国語科の場合は外国語力の向上も求められる。筆者は、2020年度、初等教育の教職課程学生向け小学校外国語関連の授業を複数開講し、後期科目の「外国語の指導法」では、より実践に焦点を当てた授業を展開し、小学校教員としてのリフレクションツール『小学校英語指導者のポートフォリオ』(JACET 教育問題研究会, 2019)を導入した。具体的には、模擬授業指導案作成時に、各自が自由に選んだ記述文について意識させ、また実践のリフレクションでは、Keep・Problem・Tryの3観点でリフレクションを書いてももらった。本研究では、この模擬授業実践後のリフレクションに焦点を当て、外国語の指導力育成に向け、学生の指導意識にどのような効果が見られたかをテキストマイニング分析した結果を中心に考察する。

キーワード：小学校外国語教育、教職課程、リフレクション、指導者、J-POSTL エレメンタリー

Key words: Elementary Foreign Language Education, Teaching Curriculum, Reflection, Foreign Language Teachers, J-POSTL Elementary

### 1. はじめに

2020年度はコロナ感染症の拡大に伴い、多くの大学でオンラインでの授業対応が一気に拡大した。対面の授業が難しくなり、同時に教育実習の実施も困難となった。その一方、教員を目指す学生には、一般的な指導力向上に加えて、外国語科目では可能な範囲で外国語による指導力の向上も必要となっている。同様に、小学校・中学校でも、2021年度にはすべての学校でICT(情報通信技術)機器導入が広がった。したがって今後は小学校教員にもICTを利用した外国語の指導力向上も求められている。その反面、AI(人工知能)技術により高性能な翻訳機も出てきており、外国語学習に対する児童・生徒の動機づけ、外国語を学習することの意味づけ、さらには翻訳機能を含めてICT機器を授業でどのように使用するかなど、外国語教育は変革期にきていると言えるだろう。

筆者は2020年度、初等教育の教職課程学生向け小学校外国語関連の授業を複数開講し、後期科目の「外国語の指導法」

では、より実践に焦点を当てた授業を展開し、小学校教員や教員養成課程履修生のためのリフレクションツール『小学校英語指導者のポートフォリオ』(JACET 教育問題研究会, 2019)を導入した。具体的には、模擬授業指導案作成時に、各自が自由に選んだ複数の記述文について意識して書いた後に、自己や他者の実践について、Keep・Problem・Tryの3観点で授業に対する省察を促すリフレクションを書いてももらった。本稿では、この模擬授業実践後のリフレクションに焦点を当て、外国語の指導力育成に向け、履修生の指導意識にどのような効果が見られたかについて検証したい。

### 2. 背 景

#### 2.1 教育のICT化加速と外国語教育

2020年度は、コロナ感染症の拡大に伴い、多くの大学でオンラインでの授業対応が一気に広まった。大学教員は、当初、慣れない遠隔授業準備などのために時間を費やし、学生からもインターネットトラブルや授業の課題提出に関する問

\* 椋山女学園大学教育学部

2022年11月8日受付

合せが殺到するなど、困難を抱えた。感染が多少取まった2021年度当初には、文科省通達により、対面で授業を始めた大学も多かったが、感染の状況次第で柔軟に対応するため、遠隔授業を併用する大学も多かったようだ。筆者の場合、遠隔授業の授業設計では、2020年度当初にFacebookの主に大学教員が参加する「新型コロナ休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」(山口, 2021)に参加し、授業手段や授業方法などの情報を入手し、その後も技術的課題や使用方法などを相談することで、解決策を模索し、他大学の遠隔授業動向や各大学の遠隔授業での工夫などの情報を得たりしたことで、オンライン授業を何とか軌道に乗せることができた。

同様に、小学校・中学校でも、文部科学省によるGIGA School構想の進展はここ数年間滞っていたものの、コロナ感染症の拡大に伴い、2021年度にはすべての学校でのICT機器導入が進んだ。先進的な学校では、単にデジタル教科書を利用するだけでなく、多様な授業実践例が出てきている(文部科学省, 2021)。またオンラインによる海外の学校との交流の外国語授業実践例(安達・阿部・北野, 2018)も見られるようになってきている。さらに、AIを使った高性能な翻訳機能のあるアプリが出てきたため、今後はiPadの翻訳アプリを用いた授業例も検討されている(成田, 2019)。したがって今後は小学校教員にもICT(情報通信技術)を使いこなす指導力も求められると同時に、児童や生徒が翻訳機能を使いながら外国語を学ぶことを前提とした授業の在り方が求められている。

日本語に対する英語のように、母語とは発音・単語・文法などが異なり言語間距離が大きい外国語の場合は、習得に膨大な時間が必要になる(白井, 2008)と言われる。その一方、AIを搭載した翻訳機を使えばある程度の外国語は容易に使うことができるようになってきている。これからは、学習指導要領(文部科学省, 2017)が総則で掲げる3つの資質能力の通り、外国語科においても、知識や技能の獲得のみではなく、学習者の主体的・対話的で深い学びの在り方が問われている。したがって、外国語の指導者を目指す教職課程の履修生にも、外国語教育や指導技術に関する知識の提供を主とする授業から、主体的に外国語の指導方法を考えて、指導力改善を目指す態度の育成が望まれる。

## 2.2 小学校英語指導者のポートフォリオ(以下J-POSTLエレメンタリー)

「J-POSTLエレメンタリー」は、小学校で外国語を担当する教員および、小学校教員養成課程で学ぶ履修生のためのリフレクションツールである。これは、EPOSTL「ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ」(European Portfolio for Student Teachers of Languages)(Newby, et al., 2007)を日本の言語教育環境で受容できるように翻訳した、J-POSTL「言語教師の

ポートフォリオ」(Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages)(JACET教育問題研究会, 2014)をベースに、小学校英語指導者用に開発<sup>1)</sup>されたものである。J-POSTLエレメンタリーは、小学校で外国語が教科化されたことに伴い、外国語を担当する先生や小学校教員養成課程で学ぶ履修生が、実践の省察をしながら、自己評価の方法を身につけることを目的としている。またCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)の理念を踏襲し、生涯学習=学習者中心・自立/自律学習、行動志向の言語観(=学習者同士のインタラクション・協働学習、異文化学習=社会文化的能力・他者理解・異文化適応力、の3つを重視している(JACET教育問題研究会, 2021a)。これは文部科学省の「主体的・対話的で深い学び」の理念の実現と一致すると言えよう。内容は、主に「自分自身について」「自己評価記述文(SAD: Self-Assessment Descriptors)」「ドシエ(関連資料集)」の3つで構成されている。

ポートフォリオとは、本来、紙ばさみのことであるが、教育においては学習に関する多様な活動の記録を綴じていくことで、学びの過程や学習者の成長が可視化されるため、文部科学省においても評価の一環として使用され得ることを示している(文部科学省, 2016)。JACET教育問題研究会(2014)によると、自分の意思で英語の学習を始め、学習の管理ができる自律した学習者になり、一生意識することが重要としているが(p.1)、教師自身も、ポートフォリオを用いて、より良い指導について考え、指導方法や授業力の改善に向けて管理をするなど、自主的に指導力向上に取り組むことが期待されている。ただし泉(2020)は、J-POSTLなどのティーチング・ポートフォリオは、教師の授業実践に関するものを蓄積する過程を通して教師の省察が促され、授業力の向上が期待される一方、作成すれば必ず省察が促進されるとは限らず、主観的部分も多く自己満足で終わることもある、と指摘している。

J-POSTLに関しては、これまで実践研究及び実証研究など複数の研究がされており、中でも高木(2018)は、EPOSTLとJ-POSTL双方の研究論文について、包括的なレビューを行っている。そして、J-POSTLについては、使用方法や教師教育者の支援のあり方については研究が不十分である一方、省察内容の変化や授業の変化、授業力の向上の変化などの把握を研究目的とするものが多いとし、今後も、J-POSTLをどのように活用すれば、教職履修生及び現職教師の省察や自律を促し授業力などの向上につながるか、さらなる研究や検証が必要、とまとめている。一方、J-POSTLエレメンタリーの方は、最新版の作成が2021年であるためまだ研究は少なく、山口・米田(2020)や米田(2021)などわずかである。前者は、「教職課程試用版」(JACET教育問題研究会, 2019)を使って、初等教職課程履修生を対象に、自己評価記述文が習得すべき資質・能力として適切かを検証することを主目的として調査し、ポートフォリオに対して履修生がどのような認識を

抱いたかは副次的目的となっている。結果としては、履修生は振り返りや教師に必要な視点が得られるなどの意義を感じたものの、自己評価記述文の多さや使用する意義が分からないという意見や自己評価については経験がないので判断できないなどの意識が明らかにされた。また米田も、「教職課程試用版」を用いて教職課程履修者を対象に、指導意識を分析した結果、学生が振り返りの足掛かりとするのは教育実習等の実践であり、また学習支援や授業内での討議が重要であることを確認している。

### 2.3 KPT の 3 観点のリフレクション

リフレクション（省察）とは、玉井（2019a, p. 21）によると、アメリカの教育哲学者、デューイの説明をもとに「自身のものの見方や知識についてそれが適切なものと自身が考える根拠に照らして、本当にそうと言えるのかをあらゆる可能的思考を視野に入れつつ吟味・検討を繰り返していくような思考法」と説明している。また玉井では、リフレクションを通じた実践研究法であるリフレクティブ・プラクティスとアクション・リサーチの関係について、前者は後者の一つの派生形と考えられる、と述べている。つまり、省察には、一度だけの振り返りではなく、経験をくり返して内省するサイクルが必要で、かつ批判的に深く理解することも求められる。さらに玉井（2019b, pp. 54-58）では、教師教育のリフレクティブ・プラクティスを、「経験について問い記述し、分析を行うことで新たな意味解釈を引き出し、自身と自身の実践についての理解を深めることによって問題の解決や成長を志向する実践研究法」と定義し、教員をめざす実践者の省察には、成長を目的とすることも求められ、また自身の経験については他者の視点で理解しようとする、豊かな理解が必要とも述べている。そしてリフレクションの方法としては、経験に基づき、問を立て、記述・分析することで理解を深めるという過程を繰り返すことを示している。

泉（2020）では、Richards and Farrell による言語教育におけるリフレクションの定義“the process of critical examination of experiences, a process that can lead to a better understanding of one’s teaching practices and routines”を紹介し、やはり授業経験を振り返り、問いを立て、記述し、意味理解を図り、その循環を繰り返すことと述べている。以上からすると、リフレクションには自己の実践に対する「批判的検証」と実践後に「書くことによる自己分析」、そして「成長に向けての繰り返し」が必要と考えられる。しかし、教職履修生の場合、教師としての経験も浅いか、ほとんど無い場合も多く、さらに初等教育課程の場合は、自身の外国語力に対する自信の無さもあって、自己の欠点や実践課題には視線を向けやすいが、前期の模擬授業実践後の振り返りでは感想的なものになりがちで、改善に向け考える余裕や具体的な視点はあまりなく、省察までを促すのは難しいと考えられた。

そこで後期の授業では、「Keep・Problem・Try」の 3 つのフレームワークからなる 3 観点のリフレクションの手法を取り入れることにした。KPT の 3 観点は、SELECK（2021）によると元になっているのは、Alistair Cockburn 氏の「Reflection Workshop」としている。筆者はこれを前述した、Facebook のグループの中の、分野が異なる大学教員の授業のリフレクション活動報告から知り、教職履修生の外国語の模擬授業実践の省察を書く際にも有効と考え、授業後のリフレクションをこの 3 観点で書くように指示することにした。省察を促すには、自己の実践を見つめ、他者と協働して視野を広げることでも多角的なものの見方を得て、次の段階ではどうするか考えることまでが重要である。自己の実践について Keep（維持すること）、Problem（今回の課題）、Try（次に挑戦すること）の 3 点に分けて考えることで、省察を促し易いのではないかと考えた。またお互いの実践についてグループで意見交換する協同的な学びの場があれば、より客観的な視点から自己の実践を見ることもできるのではないかと考えた。そこで Keep で模擬授業での実践に対して、自己肯定感を育てつつ理解を深め、Problem では他者の実践について話し合うことで具体的な省察を促し、さらに Try では次回に向けた改善を考える、という順で授業実践を省察させることで、J-POSTL エレメンタリーの目的に沿った自律学習に向けた態度を育てやすいのではないかと考えた。

## 3. 実 践

筆者は初等教員養成課程で 2020 年度に指導を始めたが、コロナ禍によって全授業をオンライン会議システム Zoom で行った。前期では、理論的な面を中心に「外国語（英語）」を、後期では、より実践的な面を取り入れた「外国語（英語）の指導法」を展開した。いずれも、2 年次開講の 2 単位の小学校教諭 1 種免許状取得のための必修科目で、コアカリキュラム（文部科学省, 2019）に対応している。テキストとして『小学校英語教育法入門』（研究社）と、教室英語のための『Let’s have fun—Teaching English』（南雲堂）を使用している。履修生は「保育・初等専修」と「初等中等専修」の 2 つに分かれており、前者は保育園や幼稚園での指導者を、後者は小学校教員を主に目指している。前者の学生の中にも小学校教諭 1 種免許状取得希望者が多く、2/3 が受講していた。どちらの学生も、免許状取得が主目的であり、また ALT（外国人指導助手）主導の授業が望ましいなどのコメントも見られ、英語の好き・嫌いについて後期の授業開始時に口頭で尋ねたところ、苦手な学生が 3 分の 2 以上を占めていた。

前期では、テキストに基づき、理論的な面の講義を中心に進めた後、授業の最後の部分（12-13 回目）では、文字指導に関する模擬授業の学習指導案と 5 分間程度の動画、実践後のリフレクションを大学指定の学習管理システム Google



表 1. 外国語（英語）の指導法の内容

	内容	実践方法
1	文字の指導	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想提出
2	音の指導・フォニックス指導	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想提出
3	他教科連携の指導	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想提出
4	教材研究 5 年生	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想提出
5	教材研究 6 年生／指導案作成の注意点	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想提出
6	5 年生指導案の話し合い	グループでお互いの指導案共有、各リポーター役から質問や要約提出
7	5 年生の模擬授業録画の話し合い×2	グループでお互いの録画を共有、各リポーター役から感想提出
8	振り返り／6 年生指導案の話し合い	グループでお互いの振り返りと指導案共有、各リポーター役から質問や要約提出
9	6 年生の模擬授業録画の話し合い×2	グループでお互いの録画を共有、各リポーター役から感想提出
10	振り返り・まとめ	グループでお互いの振り返りを共有、各リポーター役から感想提出
11	外部講師による選択式 WS	ジョリーフォニックス他全4講座から選択、受講後感想提出

Classroom に提出するよう指示していた。

後期授業の前半部分では、特に外国語の指導初期段階で、配慮すべき事項や必要な指導上の知識（文字、音韻、他教科連携の指導）について、解説する資料を作成し説明後に、Zoom のブレイクアウトルームを利用してグループで協同学習形式<sup>2)</sup>の話し合いをし、その後、学び得たことをレポートで提出してもらった。また教材研究として、実践的な授業づくりのために教科書の特徴や使い方、指導に必要な知識などを、小学校 5 年生と 6 年生の英語科検定教科書 *Here we go!* (光村図書, 2019a, 2019b) を用いて解説をした。また後期授業の後半部分では、解説を受けた教材を用いて小学校 5 年生と 6 年生の指導案作成と模擬授業実践を課題とした。教科書の中の Unit の選択は自由としたが、5 年生は、各 Unit の「展開」部分に当たる Step 2 について書くように指示した。各 Unit は導入—展開—まとめの単元構成となっており、展開に当たる Step 2 は、活動や練習など単元の中心になっている。一方、6 年生は、Unit 最後の「まとめ」にあたる Jump について 3-4 名のグループで協力して指導案を 1 つ書くように指示した。これは、Jump では比較的自由度の高い活動の設定が可能で、児童の関心を引くような活動も考えることができること、また学生間の協同性を高めるといふねらいに加え、コロナ禍で課題が多くなる傾向が強かった学期末には学生の負担を減らした方が妥当だろう、という判断もあった。

そして 5 年生・6 年生用の指導案作成時には、いずれも J-POSTL エレメンタリー（教職課程試用版）(JACET 教育問題研究会, 2019) の中から、自分で選んだ複数の記述文を意識して書くように指示した。まず J-POSTL エレメンタリーの構成と使用法を説明してから、自己評価記述文についてその意義やどのようなものがあるかなどの概要を説明した。中学校及び高等学校の英語科免許取得を目指す教職履修の学生と比べると、複数の教科の指導法を学ぶ必要のある初等教育課程の学生は、英語科に固有の指導知識は十分でない傾向が

ある。このため試用版には、93 の記述文があるがその全てについて、解説するには時間がかかる上、山口・米田 (2020) の結果が示したように、それらを学生が理解し実践するには時間的にも学生の指導能力上もハードルが高く、負担が大きいと判断した。そのため指導案作成時に各自がどの記述文を選択するかは自由であるが、授業実践後に選択した記述文について省察してもらうことも伝えた。

作成した指導案は、協同学習形式で、グループで共有・話し合い、その後修正したい場合は修正後の再提出も可能とした。また模擬授業実践は、5 年生は指導案のいずれかの部分で 5 分程度を録画してもらい、一方 6 年生はグループ内で small talk を中心とする導入部分、活動部分、振り返りのまとめ部分と担当を分けて録画し、提出するように指示した。録画した実践は、授業で共有・話し合いの後、それぞれ実践のリフレクションを、3 観点に分けて記述し、Google Classroom にアップロードするように指示した。具体的には、指導案作成時に意識した記述文について、どのように実践できたか(記述文の番号のみ記載)を含めて、①自分の実践でうまくできたことや、工夫できたこと、②自分の課題(できなかったことや今後は気を付けること)、③次から挑戦すること、の KPT 3 観点に分けて書くように指導した。よって 5 年生と 6 年生の各実践後、3 観点のリフレクションを 2 回繰り返してもらうことになる。そして、複数の記述文について書いているか、また①～③の内容が適切に書けているかに関してのルーブリック評価をした。以上の授業内容をまとめると表 1 のようになる。

#### 4. 研 究

本研究の目的は、(1) J-POSTL エレメンタリー (JACET 教育問題研究会, 2019) の記述文を意識することで履修生は模擬授業実践に対しどのような省察を行うか、(2) 5 年生と 6 年

生向けの模擬授業の実践の省察に違いはあるか、である。対象者は、ほとんどが2年生で3クラス計147名である。5年生用と6年生用のリフレクションのテキストファイルを作成し(各139名, 137名), それぞれ KH Coder 3 (樋口, 2021) でテキストマイニング分析をした。テキストマイニング分析<sup>3)</sup>には, いたう (2013) の指摘によれば主に, ①日本語は, 話題や主語がしばしば省略される, ②文字に現れないものは分析不能である, などの問題がある。そこで, これらの課題を克服するために, 出現回数だけでなくネットワーク図から省察に重要と考えられた語を中心に, その文脈を詳細に見る, KWIC (Key Word In Context) コンコーダンスによる分析と考察を行うことで, リフレクションの背景意識もできるだけ拾い上げることにした。

分析はまず, (1)5年生用と6年生用のリフレクションそれぞれで, 樋口 (2021) のマニュアルに従い語を取り出す前処理を行った。次に, (2)頻度別の抽出語彙リスト (抽出語数150語で設定) を作成し, 抽出語彙の関係性を表し, 語の出現回数に合わせて円の大きさを変えた共起ネットワーク図を5年生用と6年生用でそれぞれ作成した。また, (3)抽出語彙の中から, 履修生の省察について特徴的かつ頻度の高い語を中心に, KWIC コンコーダンスによる分析を行った。加えて, 学生が指導案作成時やリフレクション時に意識した記述文を調べるため, (4)記述文の番号を抽出するため, 再度, 品詞「その他」を含めた抽出語彙リストを作成した。そして, (5)形態素などを含む「その他」の中から数字に当たるものだけを抜き出して, それらが記述文の番号であるかを KWIC コンコーダンス分析で確認した (記述文の番号でない数字は除外)。(6)抽出した記述文番号の頻度別リストを作成した。

## 5. 結 果

### 5.1 5年生と6年生向け模擬授業の実践についてのリフレクションの結果

5年生用模擬授業実践後のリフレクションを分析した結果, 総抽出語数580463語 (うち使用23395語), 異なり語数2848語 (うち使用2225語) となった。抽出語彙の出現回数は「授業」が圧倒的に多く, 次に「児童」「思う」「英語」「実践」「活動」「考える」が頻度の高い語となった (表2参照)。共起ネットワーク図を作成した (語の取捨選択は最小出現数45, 描画する共起関係は上位60, サブグラフ検出は“modularity”を選択) ところ, 大きい左側のネットワークでは, 高頻度の語彙「授業」を中心に「児童」「思う」「英語」が近くに出現し, さらに「理解」や「日本語」とも繋がっていることから, 児童の理解を重視し, 英語を使いつつ日本語も用いて説明しようとする傾向があると推測された (図1参照)。また次に大きい左上のネットワークでは, 「指導」「ポートフォリオ」「作成」など, 指導案作成時などでポートフォリオを参考にした様子が伺えた。また「授業」は右隣のネットワークの「実践」や「行う」を通して「活動」にもつながり, 具体的な授業方法について考える傾向があるのではないかと考えられた。

6年生用模擬授業実践後のリフレクション分析では, 総抽出語数56693語 (うち使用22948語), 異なり語数2720語 (うち使用2101語) となった。やはりまず「授業」が多く, ほぼ5年生の結果と同じ「児童」「活動」「思う」「英語」などが上位語となった (表3参照)。5年生と同様に共起ネットワーク図を作成した所, 一番大きい中央のネットワークでは高頻度の単語「授業」を中心に「児童」「思う」「活動」「英語」などの語彙と繋がっているが, 今回は「授業」から直接「考

表2. 5年生模擬授業後の抽出語彙リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	672	今回	136
児童	570	理解	134
思う	479	見る	127
英語	394	子ども	127
実践	326	書く	121
活動	297	時間	114
考える	237	感じる	113
工夫	232	内容	113
自分	221	聞く	111
行う	192	次	109
指導	192	動画	109
使う	189	挑戦	102
取り入れる	153	説明	101
意識	148	日本語	96
話す	142	今後	92

表3. 6年生模擬授業後の抽出語彙リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	686	今回	140
児童	622	内容	138
活動	431	書く	135
思う	424	意識	128
英語	351	次	127
実践	284	感じる	124
考える	277	挑戦	122
自分	234	子ども	117
工夫	210	見る	116
振り返る	194	文	111
行う	163	参考	110
取り入れる	160	シート	100
指導	153	説明	100
話す	143	理解	99
使う	141	興味	98

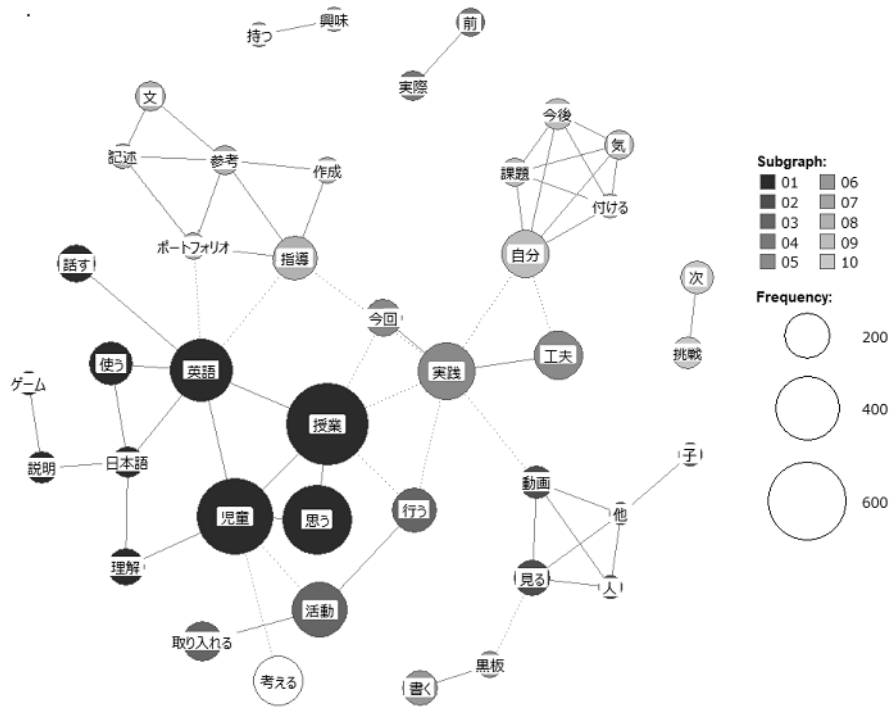


図1. 5年生模擬授業のリフレクションの共起ネットワークの結果 (N=139)

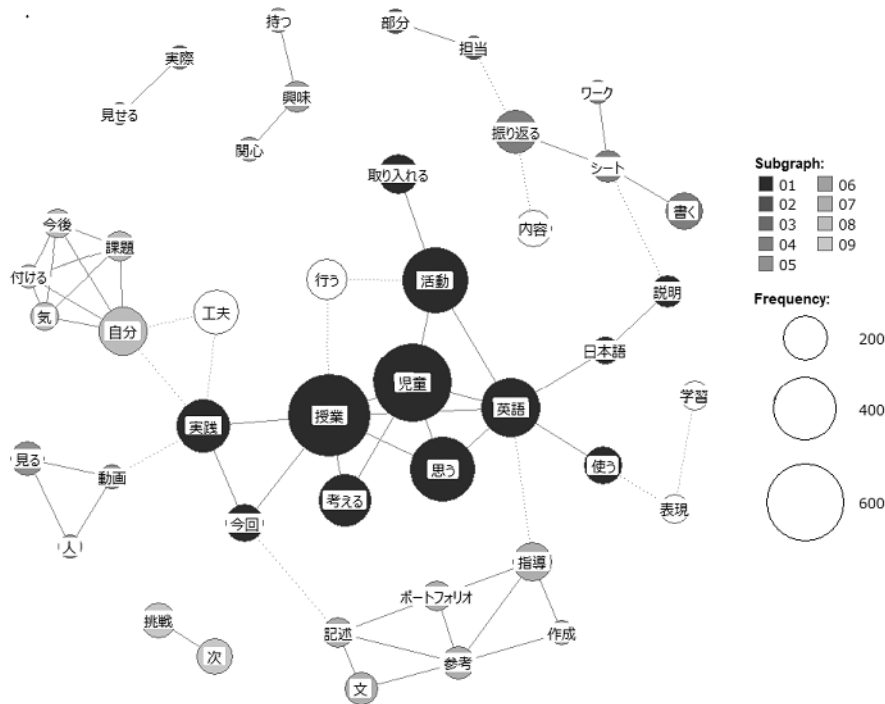


図2. 6年生模擬授業のリフレクションの共起ネットワークの結果 (N=137)

える」や「実践」にも繋がっており、より実践の在り方を考える態度があると推測された (図2参照)。また次に大きい下に位置するネットワークは、「ポートフォリオ」「指導」「作成」「参考」「記述」の語彙がつながっており、指導案作成時には、やはり記述文を意識したことが確認できた。

## 5.2 J-POSTL エレメンタリーの記述文頻度分析の結果

5年生向け指導案と6年向け指導案で意識された記述文には、共通して意識されたものが多くあり、頻度の高い記述文番号を挙げると以下のような内容であった (表4参照)。

表 4. 記述文番号出現回数頻度リスト

	5 年生		6 年生	
	記述文番号	出現回数	記述文番号	出現回数
1	19	34	77	19
2	16	30	75	18
3	77	18	20	17
4	20	17	16	15
5	75	17	69	15
6	61	15	82	15
7	21	14	64	13
8	55	14	19	12
9	64	14	22	12
10	59	13	21	11
11	23	11	38	11
12	72	11	61	11
13	27	10	78	11
14	54	10	56	10
15	80	10	27	9
16	38	9	33	9
17	71	9	66	9
18	26	8	74	9
19	66	8	83	9
20	74	8	76	8

77：必要に応じて日本語を効果的に使用

16：話す活動に積極的に参加させるために協同的な雰囲気を作りだし、具体的な言語使用場面を設定

20：非言語コミュニケーションを効果的に使って相手とやり取りができる力を育成するための活動を設定

75：フラッシュカード、絵などの準備や視聴覚教材を活用

19：自分に関する質問に答えたり～短いやり取りができる力を育成するための活動を設定

これらは、履修生は、多様な記述文の中でも特にⅡ教授法の中の A1 やり取り (16-21) や V 授業実践 (64-69) から選択していたことを示している。よって模擬授業では児童とのコミュニケーションや関係性を重視し、5 年生ではより活動に参加を促し、6 年生ではより児童の理解を深めるための記述文を選ぶ傾向があることが分かった。

## 6. 考 察

### 6.1 5 年生授業実践後のリフレクションについての考察

以下では、抽出語彙リストの頻度の高い語彙で、かつ学生の学びで特徴的な「授業」を中心に、その文脈を詳細に見る、KWIC (Key Word In Context) コンコーダンスによる分析結果を用いて、各語彙の背景意識をある程度拾い上げて質的分析を加えた考察を行う。なお下線は抽出語彙を示す。

- ・指導案を作成する時は子供達が授業を楽しめるようにするための工夫として、歌やゲームを取り入れていた。しかし、

子供達が授業を楽しむだけでは授業の意味がないため英語をより好きにさせるために ALT の先生と会話し、音楽も洋楽を日常から流し自然と英語を覚える環境など作りたいなと思った

- ・前期の時よりも授業を行うことに抵抗が減り、児童への問いかけや意識してほしい点について、より適切な指導ができていたと思います
- ・顔がこわばってしまっていたので、自然な表情で授業に臨めるとよかったです。今後の授業実践などでも意識していくポイントとしようと思います。(次に挑戦したいことは)「めあて」をはっきりさせないとあやふやなまま授業が進んでしまう恐れがあるため、児童がスムーズに授業を受け内容が分かりやすくなるように「めあて」などを書いた紙などを～(原文のまま)

このように、5 年生の模擬授業実践は、前期にも 1 度、模擬授業実践をしているので、少しは慣れてきた様子や、授業以外の工夫についても考える様子も見られたが、他者の実践を見て、さらなる改善点に気づいた様子が伺える。

また授業の次に頻度の高い語彙である「児童」については、以下の例のように、3 観点でリフレクションに書くように指示したことで、自分の課題を見つけやすいと考えられた。

- ・(自分の課題は) 実践を改めて見返すと、アクティビティの前にも児童から注目してもらえるように、もう少し指示の仕方や教師自身の表現の仕方を明るく元気よくすることや、スモールトークのようなものを挟むなどの工夫があっても良かった
- ・次から挑戦することは、他の人の授業実践を見て、授業準備を徹底したいと思いました。テンポよく児童を飽きさせないために、黒板貼るイラストや今日のめあてを用意したいです。そして、英語で話している時間が短く、児童の聞く力が育たないのではないかと思ったので、自分の語彙を増やし発音も練習したいと思います(原文のまま)

### 6.2 6 年生授業実践後のリフレクションについての考察

同様に、6 年生の模擬授業実践後のリフレクションの抽出語彙リストの中から、頻度が高く、かつ特徴的な「授業」を中心に、KWIC コンコーダンスによる質的分析を加えて、さらに考察を行う。

- ・前期と合わせて 3 回目の授業実践であることもあって、明るい話し方や児童への目線の配りなどが上達していると感じました。少し余裕をもって授業ができるようになったと思いました
- ・児童同士で意見交換することができるようになり、より深い学びをできる授業になるよううまく授業計画



- し、実践できたと思います
- ・このような5つの領域が盛り込まれた単元では児童に達成感を授業で味わってほしいです。そのために児童が振り返ることができるような支援や活動設定をこれから考えていきたいと思います。まず、授業の導入で、ペアで少し会話をさせることで～
  - ・授業で他の生徒の授業動画を見たときに、世界のお祭りの写真を印刷してそれを見せながらクイズをしている人がいて、とても面白いなと感じました。(中略) また、世界のお祭りについてのクイズは、英語を学ぶことができると同時に他国の文化についても知ることができるのでより良いなと思いました。大学生の私が見ても面白くて見入ってしまう授業でしたので、小学生にこの授業をしたらすごく興味を持ってくれるだろうなと感じました。今まで考えてきた授業にこのような活動は入れたことがなかったので、今後考えてみたいなと思いました

このように、6年生の模擬授業実践は、3回目の模擬授業実践になったこともあり、①実践+リフレクションの繰り返しによって成長が見られた。さらに、しだいに実践に慣れて他者の模擬授業実践活動から学びを深め、②児童のことをより意識して考えた実践や指導をしようとする姿勢が見られた。また、6年生用模擬授業の共起ネットワーク図では、「授業」から直接「考える」や「実践」にも繋がっていたこと、さらにJ-POSTL エレメンタリーの各記述文の頻度分析で児童との関係性を意識している結果も加えて考察すると、③J-POSTL エレメンタリーの利用によって児童とのコミュニケーションや関係性を重視する姿勢が培われたと推測された。

また「授業」の次に頻度の高い語彙である「児童」については、5年生同様、3観点に分けて記述することで省察に繋がりがやすいと推察された。

- ・(指導案作成時にうまく工夫できたことは)教科書の一つの表現にこだわるのではなく、児童が意欲的に使いたいと思う表現をなるべく使うことができるように、あらかじめ教科書とは異なる使うことができそうな表現をいくつかワークシートに提示する工夫を行いました。また、教科書の音声を用いて復習を行ったり、発表の練習はグループで行うことで、児童同士で意見交換することができるようにしたりして～
- ・また、工夫した点を2つ述べる。1つ目は、(中略) 児童に活動をさせる前に一度活動方法を全体の前で実施したことである。前時に友達の紹介文クイズを考え、その後班員の中で自身のクイズを出し合っている為(中略)しかし、児童の中には、前回の活動でうまくできなかった子、活動内容を忘れてしまった子もいるだろう。(中略) 児童は、

分からないという事を表現する子もいればそうではない子もいる為、教師が、児童のあらゆる視点から考えて、授業を行っていく必要があると考える。

- ・今回の反省点はもう少し時間に余裕のある計画にすべきだったということです。(中略) 本来の授業では、状況を見てクイズに答える時間を伸ばしたり、発表する時に複数の児童に意見を聞いたりすることが大切だと思いました。また、94の記述文が意識できておらず、発表の際に答えを間違えた児童への対応を考えていなかったため、実際に児童がいることを想定して様々な対応を身につける必要があると思いました。

これらの例は、5年生の例にも見られたように、④3観点のリフレクションによって、より具体的に省察するポイントを把握ができていると考えられた。3観点のリフレクションは、何を維持し、何に改善が必要で、今の段階ではどう改善できるか、を考えることに繋がったため、省察を促しやすいと考えられる。

## 7. 結論と今後の展望

本研究では、初等教育課程の履修生が外国語学習指導案を作成する際に、J-POSTL エレメンタリーから複数の記述文を意識して書くように指示し、模擬授業実践後に、省察を促すためKPTの3観点で振り返ることで、(1)履修生は模擬授業実践に対しどのような省察を行うか、(2)履修生の5年生と6年生向けの模擬授業の実践のリフレクションに違いはあるか、について調査・分析を行った。その結果、①実践+リフレクションを繰り返すことで成長と他者の実践を分析する余裕が見られるようになった、共起ネットワーク図およびKWIC コンコーダ分析から②6年生のリフレクションでは児童のことをより意識して実践・指導を考えようとする姿勢が見られる、③J-POSTL エレメンタリーの記述文を利用することで児童との関係性を重視する姿勢が見られる、④リフレクションはKPTの3観点でリフレクションを記述することで具体的に省察がしやすかった可能性がある、また記述文については、⑤学生が選んだJ-POSTL エレメンタリーの記述文は5年生と6年生で児童との関係性を重視するなどの類似点が多い一方、6年生では理解を深めるための記述文を選ぶなど児童の理解をより意識するようになっていたことが分かった。これらの結果から、KPT 3観点でのリフレクションによって外国語の授業に対して考えを深め、さらに記述文を意識することで、児童との関係性を重視するなどの望ましい指導の在り方について意識した様子が確認でき、指導者としての成長が認められたと言える。

課題として、今回は初等教育課程の学生が対象であるため、記述文は「複数」を意識するよう指示した結果、文字通り2



つしか意識しなかった学生も多く見られた。今後、どの程度の記述文を理解し、意識できるのか、さらなる検証が必要である。また英語に苦手意識をもつ履修生が多く、そのような学生の指導力育成に向けてどう支援していくかも課題である。加えて、コロナ以降急速に広まった ICT を利用した教育方法など、初等教職課程の学生にはさらに多様な実践的指導力が求められる。さらに AI 翻訳機によって誰でも容易に外国語を操れるようになりつつある現在、学習者に外国語学習を動機づけるのはますます困難になっている。学習指導要領の 3 つの資質能力（文部科学省，2017）の育成を目指し、外国語科においても、「外国語を使って何ができるようになるか」「外国語を使ってどう社会に貢献できるか」を意識することが指導者には求められる。そして変革期の対応には、実践＋リフレクションの繰り返しを個人だけでなく、他者と協同的に協働で行うことも重要だろう。筆者自身、2020 年度初頭に遠隔授業が急遽始まることになり、当初困惑していたが、ネット上に分野を超えて多様な教員間で授業実施のための知見や助言を得られた場があったことで、協働的・相互扶助的な情報交換によって、遠隔でもある程度対面に匹敵する学びのある授業の展開が可能になったと考えている。

複雑化・情報化・グローバル化する社会において、外国語教育においても、他の学び同様、従来の教員は外国語の知識や技能を提供し、学習者は記憶と理解を主とする受容型授業から、児童・生徒がより主体的に外国語に向き合うようにする授業への変革が求められている。そのためには今後は、指導者も、自身が自律した学習者であり続けることを意識し、同僚や教師仲間と協働的な学びによって視野を広め、自己の指導のあり方について、省察と実践を繰り返しつつ成長を続けることがより必要となるであろう。そして、指導法を担当する筆者自身も、引き続き、学生の指導者としての成長を支援しつつ、今回と同様の結果が見られるかなどの検証を今後も続けることで、指導法授業の改善に努めたいと考える。

## 謝 辞

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「4C を育成する CLIL 教育方法の研究と日本の小学校教育への応用」(課題番号:17K03031, 研究代表者:安達理恵), 同「主体的・対話的で深い学びを促す小学校の CLIL 教材・指導法の研究」(課題番号:21K00774, 研究代表者:安達理恵), 及び椋山女学園大学令和 2 年度学園研究費助成金(B)の助成による研究成果の一部である。

## 注

- 1) J-POSTL エレメンタリーの開発過程については、2016 年より小学校の英語指導者への聴聞会などを経て検討が始

まり、諮問委員や編集委員による検討協議を重ねて、まず 167 の記述草案が特定され、そのうち 93 の記述文が教職課程試用版 (JACET 教育問題研究会, 2019) として開発された。本論文ではこれを使用している。その後、現職教員用の 74 の記述文を含む暫定版を経て、最新版 (JACET 教育問題研究会, 2021b) ができた。詳細は久村・長田・山口 (2019), 中山・山口・久村 (2020), 山口・米田 (2020) などを参照のこと。なお最新版は、JACET (大学英語教育学会) 教育問題研究会のホームページ (<http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/>) からダウンロードできる。

- 2) 安達 (2018) にこれまでの経緯を記載しているが、筆者は先行研究を参考に学習者の状況に合わせて調整した協同学習をすべての授業で実施している。具体的には、①協同学習の意義を伝える、②一斉学習の時間、個人の時間、協同学習の時間と分けてメリハリをつけた授業展開にする、③グループ内人間関係の構築を目指しコミュニケーション活動を多めにする、④協同学習のために役割分担を明確にして毎回役割を変える、⑤できるだけ多様な人と交流をするためグループを適宜変えるなどである。
- 3) テキストマイニング分析とは、通常の文章の文字列をデータとして単語や文節で区切り、それらの出現の頻度や共出現の相関、出現傾向、時系列などを解析して有用な情報を取り出す分析方法である。いとう (2013) によれば、質的研究方法と量的研究方法の両方の性格を併せもち、探索的研究、仮説検証的研究、仮説生成的研究のすべてに有効であるとしている。本研究では、探索的研究と考えられ、KH コードでは学生の記述文という質的データを量的分析しつつ、KWIC コンコーダンスで質的分析を試みている。

## 参考文献

- 安達理恵 (2018). 「協同学習を取り入れたリメディアル学習者対象の英語授業」『愛知大学一般教育論集』55, 59-67. <http://id.nii.ac.jp/1082/00009082/>
- 安達理恵・阿部志乃・北野ゆき (2018). 「児童の動機づけと異文化間交流プロジェクト」『言語と文化』39, 83-97. (愛知大学語学教育研究室)
- 樋口耕一 (2022). KH Coder. <https://kncoder.net/>
- 久村研・長田恵理・山口高領 (2019). 「小学校英語指導者のポートフォリオの開発: 教職課程試用版の自己評価記述文の選定と今後の課題」『言語教師教育』6(1), 74-93. JACET 教育問題研究会. <http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/VOL6 NO1.pdf>
- いとうたけひこ (2013). 「テキストマイニングの看護研究における活用」『看護研究』46(5), 475-484. [https://www.researchgate.net/publication/275367175\\_R167](https://www.researchgate.net/publication/275367175_R167).
- 泉恵美子 (2020). 「今求められる英語教育における授業研究

- とは一内省的実践家・教師自律をめざして―』『KELES ジャーナル』5, 10-21. [https://www.jstage.jst.go.jp/article/keles/5/0/5\\_10/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/keles/5/0/5_10/_pdf/-char/ja)
- JACET (大学英語教育学会) 教育問題研究会 (2014). 『言語教師のポートフォリオ (J-POSTL)』. JACET 教育問題研究会. <http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/>
- JACET (大学英語教育学会) 教育問題研究会 (2019). 『小学校英語指導者のポートフォリオ (J-POSTL エレメンタリー) (教職課程試用版)』 JACET 教育問題研究会.
- JACET (大学英語教育学会) 教育問題研究会 (2021a). 『J-POSTL エレメンタリー紹介動画』 <http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/JPOSTLElementary.htm>
- JACET (大学英語教育学会) 教育問題研究会 (2021b). 『J-POSTL エレメンタリー最新版』 <http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/JPOSTLElementary.htm>
- 光村図書 (2019a). 『Here we go! 5』 光村図書出版
- 光村図書 (2019b). 『Here we go! 6』 光村図書出版
- 文部科学省 (2016). 「資料4-2 中学校における英語調査に関する中間まとめ」 全国的な学力調査に関する専門家会議 (平成27年6月24日～) (第7回) 配付資料, 24. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/112/shiryo/1371753.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/112/shiryo/1371753.htm)
- 文部科学省 (2017). 「小学校学習指導要領」 [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afielddfile/2018/09/05/1384661\\_4\\_3\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afielddfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf)
- 文部科学省 (2019). 「外国語 (英語) コアカリキュラムについて」 2021年9月20日引用: [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/___icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122_3.pdf)
- 文部科学省 (2021). 「外国語の指導におけるICTの活用について」 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/mext\\_00915.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/mext_00915.html)
- 中山夏恵・山口高領・久村研 (2020). 「英語指導者の資質・能力に対する小学校現職教員の意識: 小学校現職教員対象「J-POSTL エレメンタリー」全国調査の結果から」 『言語教師教育』, 7(1), 13-30. JACET 教育問題研究会.
- 成田潤也 (2019). 「機械翻訳を介しての外国語と国語の横断的学習に関する研究」 第14回児童教育実践についての研究助成研究成果報告書 公益財団法人博報堂教育財団 [https://www.hakuhodofoundation.or.jp/subsidy/recipient/pdf/14\\_14.pdf](https://www.hakuhodofoundation.or.jp/subsidy/recipient/pdf/14_14.pdf)
- SELECK (2021). 「徹底解説正しい「KPT」が仕事の成果を生み出す! 進め方のコツ, 現場の事例を紹介」. <https://seleck.cc/kpt>
- 白井恭弘 (2008). 『外国語学習の科学』 岩波新書
- 高木亜希子 (2018). 「『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ』 (EPOSTL) 及び『言語教師のポートフォリオ』 (J-POSTL) に関する研究のレビュー: 日本における今後の実践と研究への示唆」 『Language Teacher Education 言語教師教育』 3(1), 54-58. JACET 教育問題研究会.
- 玉井健 (2019a). 「第1章リフレクションと授業研究」玉井健・渡辺敦子・浅岡千利世著 『リフレクティブ・プラクティス入門』, 1-31. ひつじ書房
- 玉井健 (2019b). 「第2章リフレクションについて」玉井健・渡辺敦子・浅岡千利世著 『リフレクティブ・プラクティス入門』, 33-65. ひつじ書房
- 山口洋典 (2021). 「身体性を重視して異文化対応に身構えを」 『対人援助学マガジン44号』 11(4). (対人援助学会) 2021年11月20日引用: <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/35.pdf>
- 山口高領・米田佐紀子 (2020). 「学生調査から見た小学校英語教職課程履修生に求められる資質・能力」 『Language Teacher Education 言語教師教育』 7(1), 31-50. JACET 教育問題研究会.
- 米田佐紀子 (2021). 「J-POSTL エレメンタリーの経年使用から見た小学校英語教員養成における学生の成長と学び」 『Language Teacher Education 言語教師教育』 8(1), 71-85. JACET 教育問題研究会.
- Newby, D., Rebecca A., Anne-Brit F., Barry J., Hanna K., & Kristine S. (2007). European Portfolio for Student Teachers of Languages (EPOSTL). ECML/Council of Europe. <https://www.polzleitner.com/epep/Uni/EPOSTL/EPOSTL.pdf>